

し、木陰では、樹木の冷却効果により、気温が上がりなかつたためといえる。日中の気温差は、天候によって左右され、晴れている日ほど日中の気温差の変動幅は大きく、雨が降っている日ほど日中の気温差の変動幅は小さいことが分かった。また、夜間の気温差は小さく、天候によって気温差に大きな変化が現れることは無かった。

ミクロスケールでの観測だったにも関わらず、

気温は観測地点の周辺環境に大きく左右された。気候変化がより気温に反映されるのは芝地での観測点であり、周辺に障害物がない地点の方が天候と気温の関係を調べるのに適していると考えられるが、季節が夏の1ヵ月に限定されているため、観測地点を定めるための参考とするには、他の季節での気温変化の実情や他の特徴のある観測点での観測を行う必要がある。

靖国神社における表象の歴史

田代光恵

「靖国神社」というと、何を一番始めに思い浮かべるであろうか？

政治？外交？参拝？思想？歴史？どれもあてはまって、実はどれも大切なことを見落としている。本論文の研究動機はここにある。靖国神社という場所であるにも関わらず、場所に関する研究はほとんどない。そこに論点を絞っている。

この大切なこと、とは靖国神社の「空間的多様性」であり、一元化された価値ではない「包容力」である。本論文では、靖国神社の創建当初からの歴史に沿いながら、その「多様性」と「包容力」という側面を描き出す。たとえば、明治期の境内では、相撲や競馬、サーカス、観覧車など今では考えられないような催し物が招魂祭の度に開かれていた。民衆が多く集う、遊興の空間だったのである。それが、日本のナショナリズム、軍国主義が台頭する中で、そのような催しも消えていき、一元化された空間へと変質する。

そこで、なぜ明治期にはそのような特性を持ちながらも、それがなおざりにされてしまっ

ているのか、と言うことに対して考察を加える。戦争という国家的事業と密接に絡み合うことで靖国神社が果たしてきた役割。それを追うことで現在イメージされやすい靖国神社の姿が浮かんでくる。

現在イメージされやすいことの1次データを集めるためのインタビューや、アンケートも行っている。その中では、多種多様な言説を靖国神社が抱え持っていることが分かる。そして、民衆の空間として再び生まれ変わろうとしている、靖国神社自身の姿も浮かび上がってくる。

靖国神社を調べれば調べるほど、固定化された価値観に収まりきらない柔軟性、包容力、開放性、自由を感じる。本論文の中ではそれを逐一紹介しており、靖国神社を思想などから離れてそれ自体、一つの場所として考えるときの良き材料となると思っている。

私個人の靖国神社に対する考えはまだまとまっていないが、そのような中途半端な存在をも靖国神社は受け入れてくれる空間性を持っていることを最後に述べている。

東京論—如月小春の身体論を通して

田中真実

東京が大きく変化した高度経済成長期に幼少期を過ごし、そこで得た感覚を演劇の中で表現し、子どもたちとのワークショップをライフワークと

した劇作家、如月小春の視点を通して東京という都市を捉えていく。

如月小春をテーマにした理由は大きく3つある。